

平和記念式典に参加して

師勝中学校 渡邊 みのり

平成二十年八月六日。広島は朝から蒸し暑く、外へ出るととても強い日差しでした。平和記念公園まで向かう道はすごい人で、はぐれてしまいそうなくらいでした。ようやく着いたころには、もうたくさんの人が来ていて、中には手を合わせて拝んでいるお年よりもいました。参列者は日本人ばかりではなく、外国の人も多くてびっくりしました。八時十五分。黙とう。響き渡る平和の鐘とともに、すすり泣く声も聞こえました。ヒロシマの街は六十三年経った今でも深い祈りの中になりました。

『ちょうど六十三年前のその日、同じ時刻に、一人の男の目の前を赤トンボがすいすい飛んでいって前の塀の上にとまりました。彼が立ち上がり、帽子を手を持って、赤トンボを取ろうと手を伸ばしたとたん……。』昭和二十年八月六日午前八時十五分。ヒロシマに向かう船の上にいた私の祖父が目にしたのは大きなキノコ雲でした。その時頭が異常なほど熱かったそうです。目もくらむほどの閃光と爆風。上陸した祖父の見たヒロシマの街は、やけどの熱さや原爆による急性障害の苦しさに耐えかねて、川に飛び込んだ大勢の人々や熱線や放射線によって亡くなった人々の死体であふれていました。「兵隊さん、水をください。」血みどろになったボロボロの衣服をわずかに身にまとった人々は祖父たち兵士に歩み寄りそう言いました。祖父はただただ恐ろしく、うつむいたまま黙々と歩いたそうです。全身に火傷を負った人々の体は焼けこげ、性別の判断ができなほりほりでした。かろうじて生き残った人は瓦れきの街を水を求めて当てもなくさまよっていたそうです。ヒロシマについて祖父たちは人々の死体の処理をしました。学校の運動場に木の枝を集め、その上へ被爆した人々の死体を積み上げ、油をかけて焼くのです。死体から二次被爆するかもしれないと、死体には手を触れず、木の棒で転がして運んだそうです。

被爆者の苦悩の声で、ヒロシマの街が地獄と化したあの日、その私の祖父が海の上でなかったら、もう少し爆心地に近かったら、私はここにいなかったでしょう。その時生き抜いてくれた人がいたからこそ、ここまで命が続いているのです。私たちがいるのです。そして、この平和な国をつくりあげてくれたのもまた、生き抜いてくれた人々なのです。平和な今を生きるわたし達は、そんな人々に感謝しなくてはいけません。しかし、六十三年が経った今、人々の苦しみ、悲しみ、怒りは、私たちの心から離れていっています。現に私もそうでした。こうして戦争について、原爆について知る機会があったからこそ、事実の学び、考えることができました。そして何より、そんな機会を与えていただいた私の使命は、心から平和を願い、戦争のない時代に向かつて歩んでいくことだと思います。その第一歩として、この貴重な経験を糧として、六十三年前のあの真実を、平和の尊さを伝えていきます。

みなさん、あの日のことを遠い過去のことだといって目をそらさないでください。そして真実に学んでください。教科書の表面的な記述だけでは、本当の戦争を知ったとはいえません。是非身近な人に学び、事実を知ったうえで平和について深く考えて欲しいと思います。そして私はこの平和な瞬間に感謝し、「未来を守る」強い意志を持って行動していきます。過ちは二度と、繰り返しません。

平和への願い

西春中学校 三年 伊藤 成美

私たちは平和の使者として、八月五、六日に広島を訪れました。

五日には宮島の厳島神社に参拝しました。その後平和記念公園内にある平和記念資料館を見学しました。そこには戦争や原爆がどれほど恐ろしいか、そんなことを強く感じさせる展示物がたくさんありました。

私は小学校六年生のときに一度来たことはあるのですが、そのときはあまりに恐ろしくてすっかり見る事ができませんでした。しかし、今回は平和の使者としてしっかり見学して心に刻み、たくさんの方の事を学んできました。

展示物には被爆した学生の服や、黒焦げの弁当、溶けた一升瓶などがあり、どれも実際に当時使われていた物なので胸が痛みました。被爆した人の髪の毛やつめも展示されていました。その中でも特に恐ろしさを感じたものは、原爆被害者の状況を示すジオラマでした。ジオラマと分っていても、皮膚が焼けただれ、服もボロボロになり、炎とがれきの山の中にさまよう姿を見たらあせんとするしかありませんでした。

戦争中でも助け合いながら一生懸命生きていた人々、そんな小さな子供から大人までが八月六日八時十五分広島で地獄に突き落とされたようになってしまいました。多くの方が一瞬で溶けてしまったり、水を求めて川へ飛び込み亡くなったりと、とても悲惨な状況だったそうです。そして後遺症で今も苦しんでいる方もいらっしゃるそうです。

私たちは八月六日に広島平和記念式典に参加しました。福田総理大臣や外国の代表の方も参列されていました。今年は外国人来賓者が過去最多だったそうです。八時十五分に黙とうをささげました。平和宣言や平和への誓いを聞いて、戦争は二度と繰り返してはならないものだと思えました。

式典が終わって、慰霊碑に合掌して、市からあずかってきた千羽鶴と平和の記を「原爆の子の像」にささげてきました。私たちの他にも多くの方が平和を願って捧げていました。

その後原爆ドームを見ました。被爆前は当時珍しいつくりだったそうですが、原爆によって鉄骨は曲がってしまい、レンガは崩れて廃墟の残骸となっていました。永久保存されることが決定し、何回か補修工事をしているそうです。そして平和を求めるシンボルとして世界遺産にも登録されています。

原爆投下当時、七十五年間は草木も生えないといわれた広島で秋に新しい芽が生えたそうです。人々も少しずつ生きる勇氣と希望を取り戻して、現在の広島にまで発展できたところに、命の強さとすばらしさを感じ、また当時の復興に携わった人たちの努力に感心しました。

原爆がどれだけ恐ろしく、平和がどれだけすばらしいことか、改めて考え直すいい機会になりました。私は今この生活がどれだけ自由で幸せかを忘れないで感謝の気持ちを持ちつつ生活していこうと思います。

折り鶴は風に乗って

白木中学校 三年 梶川 直華

平成二十年八月六日午前八時十五分、平和の鐘が響き渡りました。式典は厳粛に行われ、黙とうの際には鐘の音に包み込まれました。六十三年前の「今」起きた惨事を追悼しました。

六十三年前の八月六日、青空の広がる広島県広島市の上空約六百メートルで、一発の原子爆弾が炸裂しました。爆心地から半径五百メートル以内では、コンクリートの建物でもほぼ完全に破裂され、半径二キロメートル以内にいた多くの人々が亡くなりました。かろうじて生き残った人々も、焼けこげて血みどろになり、逃げまどったのです。

ボロボロのワンピース・八時十五分で止まった懐中時計・黒焦げになったお弁当・三輪車……。広島平和記念資料館に展示されていたものです。数々の遺品を目前にし、心が強く締め付けられる思いがしました。原子爆弾の威力、怒りや悲しみを私たちに静かに語りかけているかのようでした。

その他、たくさんの痛々しく生々しい写真や被爆者の指や皮膚、髪の毛が保存されています。その中で私の心の中に鮮明に残っているのは、貞子さんの折り鶴です。貞子さんは白血病と戦い、健康の回復を祈って鶴を折り続けましたが、十二歳の若さで亡くなりました。小さな赤や黄色の折り鶴は、まるで小さな花が置かれていたかのようでした。

何のために原子爆弾が作られたのか。何故今でも核兵器が作り続けられるのか。現在、核兵器の数は二万発を越え、核戦争が起きれば人類、地球上のものは破滅の危機にさらされます。史上最大級の破壊力を持つ、原子爆弾の実験場にされた広島には、今もなお深い傷跡を人々の心の中に残しています。

式典の「平和宣言」や「平和への誓い」は、核兵器廃絶や恒久平和について訴えています。「世界の人々に平和のメッセージを伝えることを誓います。」過去の過ちを似度と繰り返さぬように、私たちが未来へ伝えていく使命と責任の重さを改めて実感することのできた言葉でした。

北名古屋市の平和都市宣言で受け取った、平和の記と千羽鶴を、私達は原爆の子の像の近くに収めました。そこには、日本各地から集まった千羽鶴もたくさん収められていました。心を込めて折られた鶴が風に乗る、世界に平和を届けてくれることを願います。

今なお起きている紛争。多くの尊い命が消えていく中で、「核兵器廃絶」・「恒久平和」を祈り、私達ができることを、解決しなければならぬ問題について、今まで以上に考えていきたいと思えます。

広島へ行って

訓原中学校 三年 久保田 彩子

一瞬にして街のほとんどが壊滅し、多くの大切な命が奪われました。私より幼い子供達もたくさんいました。目の前で起きたことが分からず、助けを待つ間もなく死んでしまった子供達。未来に生きる時間をたくさん持ち、いろいろな可能性を持っていた子供達。きっとあれもこれも、したいことはいっぱいあったはずです。広島平和記念資料館には、そういった子供達の遺品がたくさん展示されていました。ボロボロになった学生服や黒こげになった弁当箱。三歳の子が乗っていたという三輪車もありました。それらは、肉親の人たちが子供の安否を気遣って、焦土の中を探し求め、見つけたものだそうです。母親たちは何を思っただけで、胸が痛みました。

一瞬にして肉体の傷はもちろん、一生の大きな心の傷を背負ってしまった人達がたくさんいます。何年たっても治すことができない心の痛みをかかえて生きていく人達があります。私は、原爆が落ちたそのときだけが悲惨なのではなく、苦しみや悲しみはずっと続くのだと分かりました。

資料館の中には、原爆を体験した人達が描いた絵もありました。真っ黒な人の影がいくつも描かれています。人々の目に焼きついた光景と、心の混乱が伝わってきて、胸が締め付けられました。「もう二度と戦争を起こしてはいけません。世界中が助け合って、みんな仲良く平和に暮らしたい。」広島の人達の願いは、私ももちろん、世界中の人達の願いだと思います。

しかし、私にはどうしても疑問に思ったことがあります。原爆を投下した当時、アメリカの人達はなんとも思わなかったのでしょうか。広島があつという間に焼き尽くされたことを知ったとき、どう思っただけなのでしょうか。

確かに日本がなかなか降伏せず、最も効果的な方法が原爆であったかもしれない。しかし、関係のない人まで犠牲にして、傷つけたのはやっぱりゆるせません。核兵器の恐ろしさを考えない人達がいることをとても悔しく思います。式典の前、ある男の方が被爆者手帳を見せてくださいました。当時小学校二年生で約一・五キロメートルのところで被爆したそうです。何十年先の未来でもこの出来事を忘れないでほしい、そう思っただけで私たちに話してくださいました。

今の時代、原爆の被害を受けた方達の本当の苦しみや悲しみを理解することは難しいかもしれません。でも、今も亡くなった人達の分も精一杯生きている人達が辛い記憶を語っています。そのことを真剣に受けとめ、平和な時代に暮らしていることに感謝したいと思います。今回、学んだこと感じたことを、この先の未来でいろんな人に伝えたいです。

平和記念式典に参列して

熊野中学校 三年 伊藤 優志

八月五日、六日、僕は平和の使者として平和記念式典に参列するため広島に行きました。この式典に出ることは、平和について考えるうえでもよい機会であると思います。緊張しながら行きました。

初日の八月五日は平和記念資料館を見学しました。ここには、原爆で損傷を受けた様々なものや原爆でなくなった人の遺品などが展示してありました。中でも一番印象に残っているのは、広島でこれだけ多数の被害を出した核を保有している国がたくさんあるという事実です。残された遺品から、核の脅威を学ぶべきだと思います。もし、核戦争が起きるようなことがあれば、人類は破滅の危機にさらされます。そうならないように、核兵器をこの世からなくし、他国と戦わないという決意が大切であると思います。

二日目は平和記念式典に参列しました。厳かな雰囲気の中、式は進められていきました。そして、八時十五分には一分間の黙とうを行いました。六十三年前ここ広島で、原爆が投下された時間です。この原爆で犠牲になった方々、そして今もなお後遺症で苦しんでいる被爆者の方々にとって毎年訪れる、悲しみの時であると思います。しかし生き残ってくれたからこそ、僕たちまで命が続いているのです。生き残ってくれたから事実が語り継がれるのです。今、生き残ってくれた方々への感謝の気持ちでいっぱいです。

式典の後に平和記念公園内にある原爆死没者慰霊碑を参拝しました。僕は参拝するための列で、たくさんの鶴を持った一人のおばあさんを見ました。この方は、原爆で家族をなくし、一人で三千羽もの鶴を作ったそうです。僕は驚きました。大切な家族を失った悲しみを乗り越え前を向いて生きていこうとしている人がいるんだと。この方の他にも、たくさんの方々が千羽鶴を持ってきていました。とてもたくさんの方が平和について考えていることを知り、うれしく思いました。

昭和二十年八月六日午前八時十五分、原爆は当たり前の毎日を一瞬にして奪いました。しかし、忘れてはならない原爆の記憶や、核兵器に対する怒りは年々人々の心から薄れていっていると思います。僕たちが今やらなくてはならないことは、ヒロシマで起きた事実を学び、知り、考え、そして、そのことをたくさんの人に伝えていくことだと思います。これから事実を知る人がいなくなってしまうば、また同じ過ちがくり返され、戦争で傷つき、命を失った人たちの願いがかき消されてしまうからです。ヒロシマやヒロシマで犠牲になった人達が残してくれたものは何か考えるべきではないでしょうか。

原爆や戦争の事実から学び、次の世代の人たちにヒロシマの心をそして、世界の人々に、平和のメッセージを伝えていく。もし、それができれば、この世から戦争や核はなくなり、平和な世界でいられるのではないのでしょうか。

広島から学んだこと

天神中学校 三年 加納 愛

昭和二十年八月六日午前八時十五分、広島に原子爆弾が投下されました。爆心地から二キロメートル以内にあった建物のほとんどが破壊され、多くの人々の命が奪われました。かろうじて生き残った人々も、体と心に大きな痛みを受け、多くの被爆者が放射能によるケロイドや白血病、ガンなどの病気に苦しめられることになりました。

原爆投下から六十三年たった平成二十年八月五日と六日の二日間、私は「平和の使者」として広島を訪れ、原子爆弾という核兵器と戦争について学んできました。

一日目は、「広島平和記念資料館」を訪れました。私達は、まず、並べられたパネルから原子爆弾について多くのことを知りました。

広島に投下された原子爆弾は、長さが約三メートル、重さ約四トンもあったこと。そして、中にはウラン235が詰め込まれていて、高性能爆薬の約一万六千トン分に相当するエネルギーを放出したこと。爆発店の中心温度は摂氏百万度を超え、表面温度は五千度にまで達したこと…。

私はパネルに書かれていることを理解しようと努力しましたが、爆心地の「地獄の世界」を想像することは、とてもできませんでした。

しかし、焼けこげた制服、黒焦げになった弁当箱、溶けた一升瓶や瓦などの展示物を見たとき、それらの一つ一つが、「全てを焼き尽くす原子爆弾の恐ろしさを知って！」「目をそらさないで！」と私に訴えかけているようでした。私は、整然と並べられた展示物から原子爆弾の恐ろしさの一端を知ることができました。

二日目は、「平和記念式典」に参加しました。そこで心に残ったのは、小学生による「平和の誓い」です。

「突然の鋭い閃光と爆風で、数え切れない多くの尊い命が失われました。…原爆は、当たり前毎日を一瞬で奪いました。」

原爆投下で起こった惨事を切々と述べるその姿から、核兵器を使っただけじゃない、世界から早く無くして欲しいという願いを、私は感じました。

平和記念公園には、たくさんの方々の千羽鶴や平和へのメッセージが全国各地から寄せられていました。献花台には、あふれるほどの花が供えられていました。私は、人々の平和への願いはいつの世も変わらないのだと改めて思いました。

広島が発信する核兵器廃絶のアピール。多くの人々が心から願う世界平和。これらは私の心を大きく突き動かしました。

「私も何かしなければ…」「私に何ができるのか…。」

私のできることにいえば、ほんの些細なことではありません。私は思いを同じくする多くの人々と手を携え、世界平和をいろいろな場面で、多くの人に訴えていきたいと思えます。